食事作りからみる父親の子どもに対する「ケア役割」意識

髙山　純子*

Fathers' consciousness to the childcare role through their involvement in meal preparation

Junko TAKAYAMA

abstract

The purpose of this study is to explore fathers' consciousness to the childcare role by examining how they are involved in meal preparation. I conducted the semi-structured interviews from May to Oct 2012, with 8 fathers who prepared meal more than once a week. Both informants and their wives work. They are in their thirties and forties. Grounded theory approach was used to analyze the interview data. Based on the in-depth interviews, it was found that in the early stage, informants prepared meals as "partial responsibility". In this stage, sometimes fathers didn't care about their children. But gradually they regarded their involvement in meal preparation as childcare role. Then they changed their attitudes toward meal preparation and got to come up to their wives' expectations. For example, they have consciousness about safe and healthy food. As a result, they got the viewpoint of "meal preparation as child carer". It was also found that their involvement in meal preparation can build 'childcare role' identity.

Keywords：　father's involvement in housework and childcare, childcare role, meal preparation

1．問題背景と研究の目的

近年、日本において女性の社会進出が進み、結婚・出産後もキャリアを継続する女性の割合が増加している。1980年以降、「夫、妻ともに被雇用者」の共働き世帯は年々増加し、2013年には共働き世帯が1,065万世帯に対し、片働き世帯は745万世帯と（内閣府「男女共同参画白書　平成26年版」）、今や共働き家庭は特別なものではなくなった。こうした社会情勢の変化から、夫の家庭生活への関与が期待されている。しかし現状、成人の平日1日あたりの平均家事時間は、女性が4時間25分に対し、男性が50分と大きな開きがある（NHK,2010,「国民生活時間調査」）。家事・育児負担は依然、妻の側に重くのしかかっており、妻は「仕事と家庭の二重負担」（Hochschild,1989=1990）を強いられている。「夫は外で働き、妻は家

キーワード：男性の家事・育児参加，世話役割，食事作り
＊ お茶の水女子大学大学院博士後期課程

庭を守るべきである」という性別役割分業の考え方は少数派となり、「性別に捉われず、男性も女性も仕事にも家事にも責任を持つべき」という考えが多くの男性たちの間にも広まっている（松田,2005）にもかかわらず、意識と実態との間にかい離が存在していると言えよう。現在、政府では少子化対策や女性の労働力活用のために、男女共同参画の推進に取り組んでいる。事実、男性の家事・育児分担度が高い家庭では、第2子以降の出産意欲が高く、女性の継続就業割合も高いことから男性が家事・育児に取り組むことは重要な課題である（厚生労働省,2012）。

また男性の家事・育児の内容にも注目が寄せられている。多賀（2006）は育児について、子どもの社会規範の学習や価値観・行動様式の確立を支援する「社会化」と子どもができないことを援助する「世話」の二つの要素に分類した。そして、近年では父親たちに「社会化」のみならず「世話役割」を求めるようになってきたと指摘し、そうした「世話役割」を引き受ける父親を「ケアラーとしての父親」と呼ぶ（多賀,2006）。しかし日本の父親は時間の余裕があっても「世話」より「遊び」を行うことが指摘されており（大和,2008）、「ケアラーとしての父親」の姿はまだ一般的になっているとは言えない。庭野（2007）は父親が「世話役割」を受け入れるにあたり、育児休業を取得するなどして父親が子どもと二人きりになる時間が必要であることを明らかにしているが、ここで疑問となるのは父親たちの行う「世話」の内容がどのようなものであるかについてである。

そこで本稿では、父親が家事・育児を通じて子どもに対する「世話」＝「ケア役割」をどのように実践しているのか、という問いについて、家事と育児の両要素をあわせもつ「食事作り」に焦点をあて、実態と意識の両面から探索的にとらえることを目的とする。父親の家事・育児の中でも「ケア役割」、さらにその「ケア」の質や中身については日本ではほとんど論じられていないため、その点につき詳細を明らかにしたい。

2．先行研究の検討

男性の家事・育児参加に関してこれまでに行われてきた研究を概観すると、国内外での主流はその規定要因を明らかにするものであった。先行研究に基づくと、規定要因には主に（1）時間的余裕、（2）相対的資源差、（3）性別役割意識、（4）家庭内需要、（5）周囲のサポート体制の5つがある（石井クンツ,2004：中川,2010a）。このような「なぜ男性が家事・育児をするのか（しないのか）」という問いに応える研究がこれまで蓄積されてきた一方で「どのように男性は家事・育児をするのか」という実態部分や家事・育児を行う際の意識面についてはまだ明らかにされていない部分が大きい。しかし今後、男女がともに家庭内労働に主体的に取り組む社会を築くためには、男性本人の家事・育児役割に対する認識を詳細にみていく必要がある。

家事について大和（2002）は、「人々の生存・健康・快適さを維持するために行われる料理、掃除、洗濯などの活動」と定義したうえで「幼児、高齢者、障害のある人など、これらを自分でできない人々に対するケア」も家事に含まれると解釈している。すなわち、広義には育児は家事に含むことができる。ただし、石井（2013）は、「日課（routine）」と「報酬（reward）」という観点から検討した場合、家事と育児には大きく2つの違いがあると指摘する。まず、家事は日常的に繰り返す、「ルーチン化された行動」である。すなわち、育児は子どもが病気にかかるといった予期しないことが起こり得るのに対し、家事にはそのようなハプニングは少なく、毎日予定通りの行動をするものであり、そこに両者の質的な違いがみられるとする。次に、他人からの評価が得られる育児に比べ、家事は遂行しても他人から賞賛されることはまれであり、その意味で「報酬」が少ない行動である。また家事と育児を分けてみたとき、父親は家事より育児を積極的に行うことが指摘されている（大和,2008）。しかし前述した通り、近年では父親たちに育児を期待する声が高まっており、さらに従来父親が担うべきとされていた子どもの「社会化」のみならず「世話役割」をも求められるようになってきた。

育児において「世話役割」を引き受ける父親を指す「ケアラーとしての父親」言説は、授乳などの一部の生物学的な機能を除いて、父親と母親の資質の違いを前提とせず、「世話」を含めた育児への関与を父親に求めるもので、性別役割分業を否定する立場のものである（多賀,2006）。日本において性別役割分業体制は高度経済成長期に男性一人の給与で一家を養うことが可能になることで普及したが（落合,2000）、近年その社会体制自体は崩れながらも依然、性別役割分業意識は影響力を持ち続けている。性別役割分業体制の下では、女性にとって家事をすることは再生産労働の側面のほかに家事をすることで「女らしさ」を構築するジェンダー・アイデンティティを確立していくという側面がある（大和ほか,2008）。そして家事の中でも特にジェンダー・アイデンティティが反映されるうちのひとつとして「食事作り」がある（DeVault,1994）。家事を項目ごとに分析した研究はあまり多くないが、家事項目を分けて家事時間を調査した結果から、日本では夫婦間で費やす時間の差がもっとも大きいのが「食事作り」であることが明らかになっている（筒井,2011）。この原因について筒井（2011）は、食事作りが「ルーチン的」、かつ「スキルを要する」家事であることを指摘している。つまり、食事作りは毎日決められた時間に行う必要があるため、正規雇用で長時間労働をしている男性にとっては関わることが難しく、さらに男性は成育歴の中で家事スキルを身につけていないため、調理の段取りなどスキルを要する食事作りができないということである。また日本においては古くから「男子厨房に入らず」という言葉があるが、実際に食事作りに関する認識を見てみると、「食事の用意は主として妻の役割」と答えた父親と母親は、米国が52.2%であるのに対し日本では76.3%となっており、日本では多くの人が食事作りを妻の役目と考えているということが分かる（総務庁,1995）。

「食事作り」は子どものいる家庭においては家事と育児の両方の意味を持つ。大和（2008）によれば育児は「世話」、「しつけ・教育」、「遊ぶ」の3種類に分類できるが、育児としての「食事作り」は「世話（＝ケア）」に分類され、男性の参加が期待されている部分でもある。しかしDeVault（1994）のアメリカでの研究によれば、妻は食事のメニューを考えるときに家族の好き嫌いなどを考慮しながら食事作りを行うのに対し、夫は自分以外の家族の好みなどは把握しておらず、自分の好きなものを作ったり、栄養バランスを気にせず「大皿料理」を作ったりする傾向にあるという。このようにジェンダーによって「食事作り」の意味合いや実態はさまざまであると想定される。そこで本稿では「父親の食事作り」に着目し、父親が食事を作る際にそこに単なる家事ではなく育児としての意味合い、すなわち「ケア」の要素がいかに含まれているか明らかにしようとするものである。

3．研究方法

3-1. 調査の概要

調査対象者は、いずれも週に1回以上、自宅で家族のために食事作りを行う30代から40代の共働きの父親である。「食事作り」は「朝食、昼食、夕食のいずれかについて自分が1品以上の調理を担当すること」と定義している。対象者の年齢を30代から40代に限定した意図は、結婚、子どもの誕生といったライフイベントを経験する年代であり、最も家庭参加の必要性の高い世代だからである。共働きの父親としたのも同様の意図である。食事作りの頻度に関しては、全国の既婚男性を対象に家事頻度を尋ねた調査（楽天リサーチ,2011）から以下のような結果が得られている。すなわち、夫の食事作りの頻度としてもっとも多いのは「年に数回」の2割程度で、「まったくしない」という人も13%おり、「月に2～3回」以下の回答が全体の6割近くを占めている。このことから本稿において「週に1回以上」という設定により得られた対象者は現在の日本においては比較的、遂行頻度が高い人々であるということがいえる。

対象者の選択は、該当者を紹介してもらうスノーボールサンプリング方式によって行い、最終的に8名の協力を得た。職業人として多忙な世代でもあり、また前述の通り週に1回以上食事作りを行う男性は限

られた存在であることから得られた対象者数は限られている。しかし、本稿の目的が一般化を目指すものではなく仮説探索的研究であること、また父親の「ケア役割」意識について調査した研究はこれまであまりなかったことから、少数でも充分にデータ分析の意義があると判断した。

インタビューは半構造化面接方式で行い、質問内容は主に、①「食事作りをするようになった経緯」、②「どのように食事作りをしているか」、③「食事を作る際に意識すること」、④「家庭での家事・育児役割についての認識」とした。調査は、2012 年 5 月から 10 月にかけて行った。手順としては、まず調査対象者にメールにて依頼書を送信し、本研究の目的・意義を理解していただいた上でインタビューへの同意を得た。その後、対象者とは、メールにて面接日程等の打ち合わせをした。面接は 1 対 1 の対面式で、場所は対象者の希望を尊重し、カフェ（4 名）、対象者の自宅近くの公民館内（3 名）、対象者の自宅マンション内の共有スペース（1 名）で行った。インタビューの所要時間はおおむね 1 時間から 1 時間 30 分であった。対象者の属性などの情報を事前アンケートへの記入を通じて把握したうえ、インタビューガイドに沿って質問を展開した。ただし、本調査では探索的要素も大きく、語りの流れを尊重するため、全ての項目を聞き取ることを優先課題とせず、状況に応じてインタビューガイドの項目を省くこともあった。そして全員から許可を得ることが出来たため、すべてのインタビューは IC レコーダーにより録音した。その後、録音した内容はスクリプトに起こし、個人名等の匿名化を行ったうえで保存した。なお、本調査はお茶の水女子大学の倫理審査委員会より承認を得ている。

3-2. 対象者について

以下、事前アンケートの回答によって得られた調査対象者本人と家族の状況について示す（表 1 参照）。まず、対象者本人の年齢については、最年少が 33 歳で、最年長が 49 歳であった。職業については、常時雇用されている一般従業者が 5 名、自営業が 2 名、公務員（非常勤）が 1 名であった。労働時間は、約 8 時間が 2 名、約 9 時間、約 9.5 時間、約 10 時間、約 12 時間、約 3 時間がそれぞれ 1 名、無回答が 1 名である。約 3 時間と回答した 1 名は非常勤公務員の職に就いている。無回答の 1 名は、自営業者であり、日によって労働時間の幅が大きいとのことであった。婚姻期間はもっとも短い人で 5 年、最長で 24 年で、妻の年齢は 30 代から 40 代であった。妻の就労形態は、常時雇用されている一般従業者が 6 名、公務員（常勤）が 1 名、自営業の家族従業者が 1 名である。子どもの年齢は 0 歳 9 カ月から 20 歳までと幅広い。なお、0 歳 9 カ月の子どもを持つ対象者のケースは、親の食事と子どもの食事は異なるものであったが、離乳食作りに携わっていたため分析の対象に含めた。そして反対にすでに成人している子を持つ対象者もいるが、これまでの経験を語っていただいた。最後に「食事作りの頻度」であるが、週に 1～2 回程度と答えた方が多く、8 名中 5 名であった。残りの 3 名は、ほぼ毎日食事作りを行っていた。

3-3. 分析手法

分析の枠組みとしては、データに密着した分析から独自の理論を生成するグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、「GTA」）を援用した。GTA はある現象が相互作用の中で「どのように」起こるのか、「なぜ」そのような現象になるのかを明らかにするのに適した研究手法である（フリック,2002：林,2011）。そして GTA のなかでも、データを切片化せず、その文脈の理解を重視する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、「M-GTA」）（木下,2003）を参考にした。分析テーマは「食事作りへの参加において、父親の子どもに対する『ケア役割』意識はどのように形成され、深められるか」と設定し、家庭内で食事作りを行うようになったきっかけから現在に至る過程での意識と実態の変化の流れを意識して分析を行った。具体的な手順としては、まずデータの中で「食事作りの実態」と「『ケア役割』意識」に関連する箇所をとりあげ、それを一つの具体例として「概念」を生成した。次に、生成した概念を他のデータの中で検討し、類似例と対極例を確認した。そして有効とみなした概念に対しては、概念間の関連を推し測り、そこから見えてくる傾向から「カテゴリー」を生成した。最後に、カテゴリー相互の

関係を検討した。

表１：対象者のプロフィール

		Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん
本人	年齢	43歳	44歳	41歳	46歳	33歳	36歳	42歳	49歳
	婚姻期間	14年	15年	7年	8年	5年	9年	15年	24年
	最終学歴	大学	大学	大学	大学	大学院	大学	大学	大学
	職業	常時雇用されている一般従業者	常時雇用されている一般従業者	自営業	常時雇用されている一般従業者	常時雇用されている一般従業者	常時雇用されている一般従業者	自営業	公務員（非常勤）
	1日の労働時間	約8時間	約9時間	日により異なる	約9.5時間	約10時間	約12時間	約8時間	約3時間
妻	年齢	41歳	45歳	無回答	44歳	31歳	37歳	43歳	48歳
	最終学歴	大学	大学	大学	大学	大学	大学院	短大	大学
	職業	常時雇用されている一般従業者	常時雇用されている一般従業者	常時雇用されている一般従業者	常時雇用されている一般従業者	常時雇用されている一般従業者	常時雇用されている一般従業者	自営業の家族従事者	公務員（常勤）
子	年齢	4歳	一子：7歳 二子：4歳	4歳	一子：7歳 二子：4歳	0歳9カ月	子：4歳 二子：2歳	子：8歳 二子：6歳	20歳
本人の食事作り	頻度	週1～2回	週1～2回	ほぼ毎日	週1～2回	週1～2回	週1～2回	ほぼ毎日	ほぼ毎日
	家庭で始めた契機	結婚	結婚	結婚	結婚	結婚	結婚	子どもの誕生	子どもの誕生
	子どもの誕生後に変化した点	－	・内容と意識	・内容と意識	・頻度（増加） ・内容と意識	・内容と意識	・頻度（増加） ・内容と意識	・内容と意識	・内容と意識

4．結果

対象者たちの語りを分析した結果、「家事分担としての食事作り」、「ケアラーとしての食事作り」、「『ケアラーとしての父親』アイデンティティ」という3つのカテゴリーが生成された。対象者たちは、当初は食事を作ることに対して「家事分担としての食事作り」という意味合いしか持っていなかったが、子どもが生まれ、子どものための食事を作るようになることで「ケアラーとしての食事作り」の意味が加わり、食事作りの内容も変化していた。さらにそれが家族に認められることで「『ケアラーとしての父親』アイデンティティ」の形成につながっていく。このような一連の過程が明らかとなった。以下、順番にカテゴリーの詳細について述べていく。

4-1. 食事作りを始めたきっかけ：家事分担としての食事作り

まず対象者たちが食事作りをするようになったきっかけについてもっとも多くみられたのが、結婚して夫婦で家事を分担するようにした結果として、というものである。そしてほとんどの対象者は共通して「共働きだから」という理由を口にした。

> Aさん：「自分の中ではなんとなく同じ分だけやろう、というのがあって。まぁ共働きなので。だからまったく働く分に関しては、量は同じなので。」
> Fさん：「きっかけは結婚ですね。もともと私ずっと実家暮らしで自分でご飯を作るということはしていなかったんですよ。ただまぁ結婚して必要に迫られて、お互いに仕事しているんでね。妻が僕に作らなきゃならないってこともないでしょうし。そうするとまぁできないけどやってみるかということで始めたっていうのがきっかけですね。」

上の二人の語りからは「共働きならば、家事も分担すべき」という規範意識が存在することが読み取れ

る。また「妻が僕に作らなきゃならないってこともない」というFさんの言葉から、ジェンダー平等意識の存在を確認できる。Fさんは学生時代、同級生の仲間同士で集まっていても「キッチン周りのことは女性がやる」という役割分担ができているのに気付き、違和感を覚えたという。そうした違和感によってジェンダー平等意識が形成され、結婚後の家事役割遂行につながったのだろう。このように結婚当初から夫婦での家事分担として食事作りを行っていたという人が多かった一方で、夫婦二人で生活しているときにはお互いほとんど食事は作らず、外食ですませていたというケースが2例あった。

Gさん：「夫婦で働いている時は外食ばかりして家で一切ご飯を作って食べなかった、お互い。それと外食が大好きだったので。で、赤ちゃんが生まれると食べに行けなくなるんです。それでご飯作ろうかな、というのが最初のきっかけです。」

Hさん：「（子どもが生まれる前は）もう荒れた生活をしていて。家事も朝も適当に食べないとか。抜かしていた日も多かったので結婚して5年目に子どもが生まれたんですけど、子どもが生まれる前ははちゃめちゃだったと思いますね。あまりお互いにご飯も作らなかったし。」

上記は子どもが生まれたことが食事作りをするようになったきっかけ、というものである。ここで特徴的なのは両者とも、子どもが生まれるまでは夫婦互いにあまり食事を作っていなかった、ということである。つまり、食事作りを妻に任せていたというわけではない。近年では家事の大部分において外部化が可能になり、食事作りも「外食」や家庭外で調理された食品を購入して持ち帰る「中食」という形で代替することが出来る。この事例では、子どもがいない状況下で夫婦にとって食事作りの必要性は低かったといえる。しかし、Hさんが外食続きの生活を「荒れた生活」、「はちゃめちゃ」と表現していることから外食を肯定的にはとらえていないことがわかる。そして、子どもが生まれることにより簡単に外で食事を済ませることも難しくなり、食事を自宅で作る必要性が生まれたのである。このように食事を作る「必要に迫られる」状況を認識することで対象者たちは食事作りを行うようになっていた。そしてこのとき必要の程度や水準は各家庭によりさまざまではあるが彼らにとって「必要」といえる状況下におかれた際、「共働きの妻と平等に分担」という文脈で彼らの食事作り参加は位置づけられていた。共働きの父親が家事・育児を分担するのはパートナーとの人間関係的要素の影響が強いということは斧出（2008）の研究からも指摘されているが、本結果からも同様のことがいえる。

なお、Dさん、Cさん、Eさんの3人は結婚前、育ってきた環境の中で食事作りにふれた経験があったことに言及した。Dさんの場合、父親が料理人であり、幼い頃から父が自宅で料理をする姿を見て育ったと言う。そして父と共に海外の料理番組を見た思い出などをはっきりと記憶しており、それが食事作りの原点だという。Cさんは幼少期から家事に触れていたわけではなかったが、父親が定年退職後に料理をしていた姿が今の自分に反映されていると自覚していた。林（2011）は、男性が家事を行う場面で自分の父親の姿が「意識下のロールモデル」となることを指摘しているが、本結果においてもそれがあてはまるだろう。また、子どもの頃に手伝いとして食事作りに参加していたケースもある。Eさんは、母親が家庭科の教師だったため、日頃から家で家事の手伝いをしていたために食事作りへの抵抗はなかったと述べた。子どもの頃に家族のために家事を行っていた人ほどジェンダーバイアスを持つ割合は低いということが先行研究から明らかになっているが（表,2005）、そうした過去の経験は家事への敷居を低くし、結婚後の食事作り参加を促進させる働きがあると言えよう。

4-2. 子どもの誕生と意識の変化：ケアラーとしての食事作り

次に子どもが生まれてからの食事作りについてみていく。分析の結果、子どもが生まれた後、「生活の見直し」が行われ夫婦での家事分担や対象者たちが作る食事の内容に変化が生じることが明らかとなった。その変化として二点、挙げる。まず、子どもが生まれたことをきっかけに食事作りの「頻度」が高まった

という場合である。Fさんは、子どもが生まれて変わったこととして「妻が夜中、子どもに起こされる」ことが多くなったために、「朝ご飯を作る率は高まった」と語った。夜中に子どもに起こされてしまう妻の睡眠時間を確保するために自分が朝、先に起きて朝食作りを担当するようになったのである。子どもが生まれることで家庭内労働は急増し、夫の家事参加に対する意味合いは重みを増す。二人の子どもを持つDさんも「（妻が）子どもの面倒見てるから、僕がその間に家事をやっちゃうとかですね。」と語り、それまで以上に家事への責任を引き受けるようになった様子がみられた。

子どもが生まれたことによる「生活の見直し」の二つ目は、食事作りの内容や意識面の変化である。具体的には「安心・安全・健康志向」の高まりがみられた。

> Eさん：「離乳食とかを作っていて思うのはやっぱり出来る限り安心で安全で美味しいものを子どもにはって言う意識はあります。それは（子どもが生まれてから）強まったと思いますね。ちょっとくらい高くてもいいやっていう。お金で安心と安全が買えるなら買えばいいっていう感じですね。」

Eさんは子どもの生まれる前後で食事作りに対する意識も行動も「根本的には変わってはいない」としながらも、離乳食作りをきっかけにこれまでより「安心で安全で美味しいもの」を作ろうとする意識が高まったとした。その行動の具体例としては、卵などの食材を買う場所を信頼できるところに限っているという。前述した通り、家庭に夫婦という大人二人のみのときは多少の不節制も許容できるが、子どもという「ケア」の対象ができた場合、子の健康や安全のために親として最善を尽くしたい、という意識が働くのだろう。岩村（2003）では近年、離乳食や幼児食に力を注ぎ、添加物などの食品の安全性に気をかける主婦が増えていることを指摘しているが、このような価値観が父親にも存在していることが明らかとなった。子どもが生まれたことで食事作りをするようになったGさんは、当初は「自分の都合で自分の好きなものを作っていた」が、子どもの食事作りを継続するなかで意識に変化が生じ、今は「家族の健康を考えて」、「肉中心から魚中心」になったり「野菜を多く」摂り入れるようになったりしたという。この変化に関して、彼はこれまでの自分を振り返って以下のように述べた。

> Gさん：「もともと仕事ばっかりで自分中心的で、あの、そういう誰かを思いやると言う視点がなく仕事ばかりしていたので。子どもが生まれて料理を作るようになって作り続けるその先に『なんだ、料理だけが大事なんじゃないんだ。誰かのために作る、誰かがお腹がへったかどうかっていうことをきちんと自分で気づける』そこが大事なんだ、と。」

この「自分中心」から「誰かのため」、という意識の変化は子どもへの「ケア役割」意識が内面化された結果だと言えよう。このように継続的に食事作りを行ううちにだんだんと自分の気持ちだけを優先せず、家族の状況に配慮した「ケアラーとしての食事作り」が遂行されていくようになるということが示唆された。

では、こういった意識の変化に影響を及ぼす要因はあるのか。その答えとして「評価者たる妻」の存在が確認された。すなわち、妻が夫の食事作りに対して指摘や評価を行うことで夫は自分の行動や役割認識を修正していくのである。前述のGさんの場合、自分の好きなように食事作りをしていたことで「妻の反応が違ってきて」、妻にネガティブに受け止められていることを感じ取った経験が述べられた。また、Fさんのケースでは、妻からもっと「子どものことを考えた」料理を作るように言われ、今は「なるべく子どもが食べやすいもの」を意識して食事作りをするようになったという。

> Fさん：「昔はやっぱりもっと辛いもの。あとつまみっぽいものとか作ってましたけど。今は薄味で、

辛くないものが中心ですね。（中略）もし余裕があれば子ども用のやつと大人用のやつ作り分けることもあるんですけど、まぁめんどくさいこともあるのでまぁいいやと、子ども味で。」

味付けを「子ども味」にするなど、子どもへの配慮をするようになった一方で、Fさんは「妻からみるとそうではない、十分ではない」というように妻からの評価を認識していた。

Fさん：「なるべく（子どもにとって）食べやすいように意識しているつもりなんですけど、まぁ妻からみるとそうではないような…十分ではない。『もっと子どもが好みそうなものを作った方がいいんじゃないか』と言われますけどね。」

この語りから浮き彫りとなるのは、妻の評価を意識し、妻の設定する食事作りの「水準」に応えようとする姿である。父親たちがそうして妻の反応を意識し、自身の行動を修正していく理由として考えられるのは妻の方が家事・育児に関して詳しく、また責任感も強い、ととらえているからだと推測される。例えばEさんは、食事作りは子どもがいる場合には「ライフライン」となるが「そういう意識」、つまり食事作りを子どもの命を支えるために不可欠なものだと思う意識は自分よりも「妻の方が強い」という。そのように妻の方が子どもの「ケア」に対する理解が深いと認識していることから、夫は「評価者たる妻」の存在を重視し、それに倣う形で自分の行動を修正していくのだろう。そしてそのような相互作用と実践を経て、父親としての「ケア役割」意識も形成されていくと考えられる。

4-3. 「ケアラーとしての父親」アイデンティティ

以上のような食事作りを通して、対象者たちは「家族に認められている実感」を得ていた。特に子どもから認められた「証」として「パパの料理」の確立がある。

Bさん：「子どもがこの料理は『パパの料理』って勝手に決めてるのがあるんですね。 例えばオムライスとか、チャーハンとかそういったものが、パパが作ると言うふうに決まっていて。（中略）だから『チャーハンとかオムライスはパパが作って』と言ったりするので。僕はたいして（妻と比べて）味は変わらないと思ってるんですけど。」

Dさん：「うちの奥さんが一カ月くらい入院している時があって、やっぱり一人だと大変だったんでうちの奥さんのご両親が泊まりに来てくれたんです、一週間くらい。そのときに、うちの子どもたちが『パパの卵焼きが美味しい』とか言って、『美味しいから食べたい』みたいな話して（中略）、それで作ってあげたことがあったんですね。食べ慣れているっていうのもあるかもしれないですけどね。」

上記の語りでは「パパの料理」、「パパの卵焼き」など父親が作る食事を子どもが望む姿が見られる。そしてここで注目したいのは、「パパの料理」が「ローストビーフ」や「スパイスにこだわったカレー」等といった特別なメニューではないということである。岩村（2003）は夫の関わる料理が料理の中身よりもイベント的な調理行為に重点が置かれる様を指摘しているが、本結果から得た「パパの料理」という概念には「ハレ」の要素は見当たらない。Dさんも得意料理の卵焼きは「材料も素朴なもの」だとし、「作っているうちにだんだんうまくなってきて、それで得意なメニューになった」と語った。加えて、「結構お料理教室で習っても家にある材料じゃなかったりとか。そうだとすぐ手軽にできないんですけど。」と言及しており、「パパの料理」と成り得るのは日常的なメニューだとみえる。そして、そのように繰り返し作られてきた食事が家族に認められることを実感し、喜びを見出すことで、「ケア役割」は父親の自己アイデンティティの一部になっていくことが示唆された。

日本の父親にとって、自己アイデンティティの中で職業アイデンティティが占める割合が大きいことは既知の事実である。しかし食事作りを通して子どもと関わることの大切さに目を向けるようになったというGさんは「自分が関わる場所すべてにおいて」役割が存在するとし、「会社でできているのに家でできない、これは明らかに怠慢だと思います。」と言う。この言葉からは「ケア役割」も稼得役割と同様に位置付けられていることが分かる。アイデンティティとは象徴的な自己意識であり、自己の認識と他者からの承認との相互作用のなかで社会的に形成され、変容するものである（矢澤ほか,2000）。本稿では家庭での父親の食事作りにおいても、継続的な実践と家族との相互作用を通じ、「『ケアラーとしての父親』アイデンティティ」が形成されていくことが明らかになった。しかし、その一方で家庭内役割の遂行に葛藤が生じていたケースもあった。

> Aさん：「（家事を）やろうとするとすべてママのまねごとになってしまうので。家事全般が、もともとママのやるべきこと、とは言いたくないんですけど。でもなんかもっとほかにやることがあるのかなぁと。」

Aさんは休日を中心に食事作りを行っているが、「その時のマイブーム」のものを作り続けるなど、食事作りの際は自分の趣味が先行していた。また父親が食事を作ることについて、「お母さんが作ると普通」、「（自分が作ると）それだけでサプライズ」などと語っており、父親の食事作りを「特別なこと」としてとらえている。妻との家事の分担について、「共働きであれば半々」と語るAさんであったが、育児において「父親」であろうとする、換言すれば男性性の表出を模索する様子からはジェンダー意識の揺らぎが存在することがうかがえた。ジェンダー平等意識を持っていることは「ケアラーとしての父親」アイデンティティの下支えとして重要であると言えよう。ただし、もともとはジェンダー平等的な価値観を有していなかった場合でも、家事・育児に参加することで役割に性差はないということを実感し、結果としてジェンダー平等意識を持つようになるケースもある。Hさんは専業主婦の母を持ち、父親は家事や育児をするタイプではなかったため、結婚前は結婚相手が母と同じように「家事とかをやってくれる」ことを当然視していた。しかし結婚し、子どもへの「ケア役割」を引き受けるようになって性別による役割の違いはないと感じるようになったと言う。

> Hさん：「やっぱり3時間おきの授乳なんかを見ていると夜中も11時にあげると次、夜中の2時だし、明け方の5時なので睡眠不足で彼女ふらふらになってしまったので、一回くらいは私が粉ミルクを溶かしてあげればいいな、と思ったのでそういったことがきっかけで特にその男女差みたいなのはないなと思うようになりました。」

このように「ケア役割」を引き受けることで性別役割分業意識を変容させる様子は庭野（2007）でも指摘されているが、ジェンダー平等意識は「ケア役割」の実践を促し、「ケア役割」の実践がジェンダー平等意識を強める、という相互関係があるのだと言えよう。

5．結論

ここで、父親の食事作りの実態と子どもに対する「ケア役割」意識との関連について、本研究で得られた結論を提示する。まず当初は共働きをしているから自分も家事に参加せねばならない、という意識、すなわち「家事分担としての食事作り」が彼らの食事作りへの関わりの動機づけとして大きな部分を占めていた。次に、子どもが生まれることでそれまでの生活は見直され、育児として食事作りが行われるようになっていく。しかし、父親の作る食事は「自分の好きなもの」であったり「子どものことを考えていない」

面があったりするため、妻からの指摘を受ける経験をしていた。そこで試行錯誤を重ねる中で、「ケアラーとしての食事作り」が形成されていく。ここでいう「ケア」としては、子どもの食べやすいものを作ろうとする「子どもへの配慮」や「安心・安全・健康志向」が見られた。これらは独身時代や夫婦二人だけの生活の際には意識されておらず、子どもが誕生し、父親が家事・育児に携わる中で生まれてきたものである。そして「ケアラーとしての食事作り」が家庭内での自己肯定感を高めることにつながり、「ケア役割」がアイデンティティとして形成されていく様も示唆された。

ここで、従来の父親の家事・育児参加に関する研究のなかでの本稿の位置づけを示したい。本稿では育児の中でも「ケア」、そしてその「ケア」も一枚岩的にとらえるのではなく、「ケア」の中の食事作りに焦点をあてることでその内容を詳細に追い、意識と実態の関連性を明らかにした。そこからは、家族との相互作用を経ながら「男の料理は非日常」という言説を乗り越え、「ケア役割」を段階的に内面化していく父親たちの姿が示された。これまで父親の育児の内容に着目した研究は少なかったが、本稿ではそこに着目したことによってこれまで妻に偏っていた「ケア」をいかに父親が引き受けるかについて重要な示唆を与えたといえる。

ただし、対象者たちの中には時間の融通のきかない仕事をしているため平日の家事・育児参加が難しく、妻と平等に「ケア」を分担できないことを悩んでいるケースもあった。労働環境の改善は女性の家事・育児分担や責任を軽減するためにも必要だが、仕事と家庭を両立するライフスタイルを希望する男性も多くいることを念頭に置き、男性のニーズもふまえながら労働環境を改善することで、男性の家事・育児参加が促進されると考えられる。

最後に本研究の限界と今後の課題を述べたい。本研究では調査対象者の募集にスノーボールサンプリング方法を用いており、結果としてホワイトカラー層、高学歴層への偏りがみられた。またサンプル数の面でも限界があるといえる。ただし、現代のホワイトカラーの男性たちには、一方で仕事に引き込み、もう一方で家庭に押しやるという二律背反する力が働いていると多賀ほか（2008）は指摘している。こうした中で、そのような男性たちが「あれか、これか」という選択ではなく、職業役割と「ケア役割」を同じように重要なものとして両立させる可能性を示したことには意義があったと考えている。今後はサンプル数を増やし、他の属性との比較検討を通じて本稿で得られた理論をより深めていきたい。次に、本稿では主に食事作りに関するデータの分析を行ったため、「ケア役割」意識がその他の家事・育児の場面でどのように表れているかは把握できておらず、「父親の家事・育児」すべてに通ずる理論であるとはいえない点に留意しなければならない。食事作りは家族からの反応が得やすいという点で、石井（2013）の言う「報酬」の高い家事の部類であることも想像される。ただし語りの中では食事作りと他の家事との関連を示すものが多くみられたことから、今回の研究結果がその他の家事・育児の場面で当てはまるかどうか検討を重ねたい。

引用文献

DeVault,M.L.,1994, “Feeding　The Family: The Social Organization of Caring as Gendered Work”, The University of Chicago Press.

林葉子,2011,「育児休業を取得した男性の育児生活形成プロセス」『生活科学研究』18：83-96.

Hockschild,A.R.,1989,“The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home”, Viking Penguin.（=1990,田中和子訳『セカンド・シフト：第二の勤務—アメリカ共働き革命のいま』朝日新聞社）.

石井クンツ昌子,2004,「共働き家庭における男性の家事参加」渡辺秀樹・嶋崎直子・稲葉昭英編『現代家族の構造と変容』東京大学出版会,201-214.

石井クンツ昌子,2013,『「育メン現象」の社会学：育児・子育て参加の希望を叶えるために』ミネルヴァ書房.

岩村暢子,2003,『変わる家族 変わる食卓—真実に破壊されるマーケティング常識』勁草書房.

木下康仁,2003,『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂.

厚生労働省,2012,「第9回21世紀成年者縦断調査」.（2015年3月27日アクセス）
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/judan/seinen12/index.html
松田 茂樹,2005,「性別役割分業意識の変化」第一生命経済研究所.
内閣府　男女共同参画局,2014,「男女共同参画白書　平成26年版」.（2015年3月27日アクセス）
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h26/zentai/
中川まり,2010,「子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加」『家族社会学研究』22（2）：201-212.
NHK,2010,「国民生活時間調査」.（2015年3月27日アクセス）
http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2011_04/20110401.pdf
庭野晃子,2007,「父親が子どもの「世話役割」へ移行する過程--役割と意識との関係から」『家族社会学研究』18（2）：103-114.
落合恵美子,2000,『近代家族の曲がり角』角川書店.
表真美,2005,「子どもの家事労働とジェンダー形成・人間形成」,『京都女子大学発達教育学部紀要』1：73-79.
表真美・小澤千穂子・袖井孝子,1990,「母親の就業と食生活」『国民生活研究』30（2）：47-59.
斧出節子,2008,「なぜ父親は育児をするのか？」大和礼子・斧出節子・木脇奈智子『男の育児・女の育児—家族社会学からのアプローチ』:91-114,昭和堂.
Parsons,T. and Bales,R.F.,1956,"Family:Socialization and Interaction Process,Routledge & K.Paul."(=2001,橋爪貞雄ほか訳『家族－核家族と子どもの社会化』黎名書房）.
総務庁青少年対策本部編,1995,「子供と家族に関する国際比較調査報告書」.（2015年3月27日アクセス）
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/kodomo/kodomo.htm
多賀太,2006,『男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース』世界思想社.
多賀太・東野充成・佐々木正徳,2008,「生活史に見る男性のワーク・ライフ・バランス：新自由主義下の労働管理・家庭教育・アイデンティティ」日本教育社会学会大会発表要旨碌 60:139-144.
筒井 淳也,2011,「日本の家事分担における性別分離の分析」田中重人, 永井暁子編『第3回家族についての全国調査（NFRJ08）第2次報告書 第1巻: 家族と仕事』（日本家族社会学会 全国家族調査委員会）:55-73.
フリック・ウヴェ,2002『質的研究入門—＜人間の科学＞のための方法論』小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子　訳,春秋社.
大和礼子,2002,「「家事」はどのようにとらえられてきたか？—「公共/家内領域の分離」という社会認識との関連から」『関西大学社会学部紀要』33,3:75-135.
大和礼子,2008,「母親は父親にどのような「育児」を期待しているか？」大和礼子・斧出節子・木脇奈智子『男の育児・女の育児—家族社会学からのアプローチ』:115-135,昭和堂.
矢澤澄子・国広陽子・天童睦子,2000,「子育て期の女性の『母アイデンティティ』とジェンダー意識一都市女性のライフスタイルと市民生活調査から一」東京女子大学社会学会紀要『経済と社会』第28号.